

「天塩川の河川整備計画に関して寄せられたご意見について (H18. 5. 30 付け)」  
に対する申し入れ

私どもの提出した冊子『サンルダムは本当に必要なのか？～天塩川の治水計画とサンルダム建設計画の問題点～』の内容について、私どもと北海道開発局双方による議論を行い、貴委員会の委員より質疑を受ける場を設けることを提案いたします

私どもは、去る 3 月 23 日、今まで挙げてきた問題点を整理し、私どもの提言を含めた冊子『サンルダムは本当に必要なのか？～天塩川の治水計画とサンルダム建設計画の問題点～』としてまとめ、今後の貴委員会の議論の資料として活用していただくとともに、委員会の席上でその内容を説明させていただきたいと願い配布させていただきました。これに対して、貴委員会は、第 13 回流域委員会で、事務局である開発局に冊子の「精査」を委託し、まず、開発局が冊子の内容を「精査」し、流域委員会での検討に値する内容かどうかを調べる、としました。ところが、前回 5 月 30 日に開催された第 14 回流域委員会において、開発局は「天塩川の河川整備計画に関して寄せられた意見について」を資料 5 として配布しました。この資料は「追加で寄せられた 70 の意見に対する説明」とされたもので、貴委員会が開発局に要請した、私どもの冊子の「精査」という内容にも体裁にもなっておらず、根本的に問題です。

さらに、私たちが 120 ページにも及ぶ冊子で詳しく検討し、問題としたさまざまな検討課題について、この資料では、ほとんど何も回答されておりません。示されている図の多くは、すでに HP で公開されている図にすぎず、私たちはそれらに詳しい検討を加え、問題点として指摘しているにもかかわらず、これまでと同じ説明を繰り返す、という態度は、私たちの提起した疑問点に真摯に対応しないと言っても過言ではありません。貴委員会が要請した「精査」にも値しないばかりか、北海道開発局は国民と流域委員会に対する説明責任を全く果たしていないと言わざるを得ないでしょう。

別紙資料にあげたいいくつかの項目では、私どもが冊子で提起した疑問点に対して、これまでに公表されていなかった新しい資料で言及されているものの、これらの資料はただ数字やグラフが並べられているだけであり、その根拠は明らかにされていませんので、別紙資料に改めて問題点として指摘いたします。特に開発局は、これまで一貫して「整備計画の目標は昭和 56 年洪水」と公言してきたにもかかわらず、実は一部の計算には断りなく昭和 48 年洪水の値を用いていたことを初めて明らかにしました。これは重大な問題です。

第 14 回流域委員会では、貴委員会において私どもの意見を説明する機会を設けることが提案され、次回委員会で決定されることになりました。開発局の「精査」が、そもそも貴委員会から要請されたわたしどもの冊子の「精査」にはなっていないこと、「精査」の内容があまりに不十分であること、開発局による新たな説明にはさらに矛盾や

疑問点が生じていることから、第14回流域委員会に出された資料5を「精査」として容認することなく、住民等の意見を十分に聴取するという流域委員会の役割に鑑み、次回の委員会では、「開発局と私ども双方による説明と議論を行い、貴委員会の委員がそれに対して質疑できるような公開の場」の設定をご検討いただきたく、ここに申し入れを行います。

末筆ではございますが、問題点の一刻も早い解決をめざし、現在と未来の住民のための、よりよい天塩川河川整備計画が、全体の合意のもとに作成されることを心より祈念いたします。

平成 18 年 6 月 30 日

サンルダム建設を考える集い

下川自然を考える会

名寄サンルダムを考える会

北海道の森と川を語る会

大雪と石狩の自然を守る会

旭川・森と川ネット21

環境ネットワーク旭川・地球村

遊楽部川の自然を守る会

北海道自然文化ネットワーク

サンル川を守る会

北海道自然保護連合

社団法人 北海道スポーツフィッシング協会

社団法人 北海道自然保護協会

(申し合わせにより捺印は省略させていただきます)

---

別紙資料；

天塩川の河川整備計画に関して寄せられたご意見について（H18. 5. 30 付け）  
で新たに示された数字やグラフとその問題点

1：（p. 2）真薫別での名寄川の目標流量が、何故  $1500\text{m}^3/\text{s}$  にもなるのか、という  
疑問に対する回答

これまで、昭和 56 年洪水を目標にすべての河川整備計画を考えてきたはずであるのに、今回、初めて、名寄川については昭和 48 年洪水の流量を目標にしていたことが明らかになった。これは河川整備計画に対する重大な問題であり、あらためてその妥当性が問われることになる。

2：（p. 5）真薫別でのハイドログラフ

同上。これが昭和 48 年洪水をもとにしていることが初めて明らかにされた。これまで一貫して、「昭和 56 年洪水を対象に整備計画をたててきた」と言ってきた開発局は、これまで流域委員会に対してもそれを隠してきたことになり、重大な問題である。

3：（p. 12）サンルダム地点のハイドログラフ

同上。これも昭和 48 年洪水をもとにしたものなのか。昭和 56 年洪水ではどうだったのか。開発局はすべてを説明する義務がある。

4：（p. 10）サンルダムの設計洪水流量が  $950\text{m}^3/\text{s}$  であること

根拠がまったく示されていない。

5：（p. 13）サンルダムによる水位低減効果

初めて、区間ごとに、低減効果がちがうことを示したことは評価できるが、示された数値については、それぞれについて、河川断面とともに、その根拠を示し、検証できる説明をお願いしたい。

6：（p. 23）名寄市の水道料金

サンルダムの使用権に関わる費用は、「減価償却費、原水費あわせてわずか 1000 万円にすぎない」というが、ダムの建設コストの負担分、給排水の設備投資その他について、何も言及されていない。

われわれは冊子のなかで、札内川ダム建設後に、帯広市の水道料金が 6 年間で 2 倍にもなった現実を例にあげている。名寄市ではそのようなことは起きない、というならば、札内川ダム建設によってなぜ帯広市の水道料金が値上げされたかを説明し、サンルダム建設では、そうしたことは起きないことを説明すべきである。

7：（p. 36）河床材料の変化

岩尾内ダム建設の前後で比較すべきである。また、資料で示された昭和 44 年と平成 8 年の間だけでも、河床材料に関し、かなりの粒度の減少が明らかである。